

追悼の辞

基礎人間学講座・比較哲学分野 早坂 俊廣

谷澤淳三先生は、平成19（2007）年2月20日朝、いつも通り慣れた信州大学のキャンパスに、しかしいつもとは全く異なる形で到着された。谷澤先生が心血を注いで職務に当たられた人文学部にはなく、キャンパス内で人文学部の真反対に位置する医学部附属病院に、救急車に乗せられて。その日の正午、そのまま息をひきとられた。あまりにも突然すぎる死であった。

講座の卒業論文指導会の席上で、「死の恐怖を克服する」という言葉を安易に口にした学生に対し、谷澤先生が「俺は死が怖くて怖くて仕方がないけど、それって克服しなきゃいけないものなのかなあ!？」と鋭く突っ込まれたことがあった。今はただ、先生にとっても唐突すぎる死が、先生に恐怖も苦痛も与えないでくれたことを、祈るばかりである。

谷澤先生は、信州大学人文学部において、研究者としても教師としても多くの刺激を周りの者たちに与え続けてくださった。古代インドのパーニニ文法学派、特にバルトリハリの思想について卓越した論考をいくつも発表されただけでなく、その文法学に則った正統的なサンスクリットを惜しみなく学生に教授された。豪放磊落に見えて実は非常にこまやかな愛情に満ちあふれた先生の人柄に惹かれて、毎年、サンスクリットを学ぼうとする多くの学生が、先生の演習に参加した。

先生の研究上の特色としては、インド哲学と西洋哲学との「比較」という点が挙げられよう。ここで「比較」とあえて括弧付けにしたのは、先生ご自身があまり「比較」という言葉を好まれなかったことによる。先生が精力的に作成・運営されてきた「基礎人間学講座ホームページ」(<http://fan.shinshu-u.ac.jp/~tetsugaku/>)には、以下のような先生の主張が掲載されている。

たとえば、ラッセルとウィトゲンシュタインを比較しても、誰も「比較哲学」とは言いません。なぜ西洋とインドの哲学を比較すると「比較哲学」と言うのか。これは、両者が「異質」のものであるからという前提があるように思えます。しかし、認識論、論理学、言語哲学などなど、いろいろとやってきてみて、両者の問題意識は基本的に違わない、すなわち、両者が「異質」ということは間違っているのではないか、あるいは少なくともミスリーディングではないかと感じるようになってきたわけです。

先生が傑出していたのは、多くの専門的な論考の中でこのことをみごとに証明し続けてきただけでなく、毎年の講義で、この主張を学生に熱く興味深く、そして楽しく語り続けてこられた点にある。講義においても、分野を問わず多くの受講生が集まったばかりでなく、授業アンケート等では常にとびぬけた評価を獲得し続けてきた。先生はまさしく、信州大学人文学部の看板教授であった。

谷澤先生は、学生が「ほんとうに」「真の」といった言葉を使用するのを好まれず、「ほんとうに、ってどういう意味だ?」「真の、とか簡単に言うけど、そんなもの有るの?」と、

いつも問いかけておられた。そういう言葉で安易に話を済ませようとする思考の怠惰を戒めたかったからであろう。だが私は、心からこう断言する。「谷澤先生はほんとうに、真の教師、真の研究者、真の哲学者でした」と。

先生、文句があるなら、早く出て来て叱ってください。